



第73号
 発行
 釧路湖陵同窓会
 くまざさ編集委員会
 発行日
 2018(平成30)年
 8月11日
 印刷所
 藤田印刷(株)

13年振り
湖陵OB校長着任
第36代 西堀隆亮さん(湖陵30期)

今年4月、第36代校長として湖陵高校に着任した西堀隆亮先生は、2005年から2年間で、第30代校長を務められた数間田敏先生以来、平成に入ってから二人目の湖陵OBの校長となりました。西堀校長は昭和34年釧路市の生まれ。父親も高校の教員であったことから、小・中学生時代は道内での転校を繰り返したそうです。高校進学時には中標津から単身釧路へ。母親の実家があった釧路の祖父母宅から湖陵高校へ通いました。湖陵30期生でした。

「最初はお昼の弁当も祖母が毎朝用意してくれましたが、2年生の時にガンで亡くなったために、3年次に下宿に移るまでの半年ほど、自分で弁当を作っていました」と話します。

「高校を卒業するまでは、教員になるつもりはありませんでした。父親の大変さも間近でみていたので、自分は民間企業で活躍するつもりだった」ことから、東京の教育系の大学を選ばず、武蔵大学の経済学部へ進学。ただ、就職過程だけは選択しました。地理・歴史、公民が専門です。



「教育実習が湖陵高校だったことが転機に」と西堀校長

転機は大学4年の春に、母校である湖陵高校で教育実習をおこなったこと。教え甲斐、育て甲斐のある後輩たちと接するうちに、人間教育の魅力と意義を痛感し、卒業時には大手企業からの内定を蹴って、教員の道を選びました。

初任校は管内の白糠高校でした。ここで野球部の顧問を務め、高校球児たちの指導に当たることになります。これ以降、転任先の苫小牧や北広島などの高校でも野球部の監督や部長を続け、24年間を野球部一筋に指導に当たります。

「野球部員たちと接することで生徒指導の楽しさを知り、やがて試合の審判も務めるようになりました。全道大会では何度も、大観衆を前に審判をしていると、やがて人前で話をしてあまり緊張

しなくなるなど、教員としてもステップアップできたかと感謝しています」と話す西堀校長。もともと野球は大好きだったそうですが、親が転勤族であったために入部を我慢してきたといいます。

釧路はやつぱり寒いけれど、湖陵は温かい。この言葉は、7月に札幌市で開催された同窓会「札幌湖陵会」での祝辞として披露し、やんやの喝采を受けた西堀校長のスピーチだったといえます。「着任早々、30期の仲間が歓迎会を開いてくれるなど、本当にふるさとのありがたさを痛感しました」と話すように、卒業以来40年ぶりの釧路暮らしをエンジョイしている西堀校長。

在校生ならば、今年の湖陵祭の開会式で見た西堀校長のちよっぴり「ハジけた」パフォーマンスに思い至るのではないのでしょうか。毎朝できるだけ玄関に立って、登校する生徒たちに「おはよう」と声を掛けていますが、まるで保健室のようになり、いろいろな生徒たちが入れ替わり立ち替わり校長室を訪れ、さまざまなお話やお願いの事を持ちかけてくるというも、ひとえに西堀校長の気さくな人柄によるものでしょう。西村貞広(湖陵30期)

目次	SSH 2期目に	2頁	各地湖陵会	6頁
	敷島倶楽部町内会 100周年	3頁	教職員湖陵会・遺稿集出版	7頁
	沖口先生の思い・共通テスト	4頁	全国大会へ・編集後記	8頁
	60歳機に釧路へ・数学で全道一	5頁		

2期目のSSH校として 指定されました

科学的な創造性・国際的な生徒育成を目的に

文部科学省が指定する「SSH（スーパーサイエンスハイスクール）」とは、先進的な科学技術や理科・数学教育を通じて、生徒の科学的能力や科学的思考力などを培うことで、将来社会を牽引する科学技術人材を育成するための取り組みとされています。2002年にスタートしたこの取り組みでは、「科学への夢」や「科学を楽しむ心」を育み、生徒の個性と能力を一層伸ばしていくことを目的に、地域の大学や研究機関などとも連携しながら、先進的な理数系教育を実施し、魅力的なカリキュラムを開発するなど、科学技術に夢



探究活動の発表会の様子（普通科）

と希望を持つ、創造性豊かな若者の育成を目指しています。2018年度は全国で約200校、道内では10校ほどが指定を受けましたが、理数科を持つのが湖陵高校では、創立100周年を迎えた2012年に釧根地域で初

の指定を受け、2016年度までの5年間にわたり、SSH指定校として数々の実績を積み重ねてきました。

SSH指定校の事業期間は基礎枠で5年間ですが、指定を受けるためには具体的な企画書を文部科学省に提出し、審査を受けなければなりません。中一年空いたとはいえ、今年度指定を受けた道内10校の中でも、2期目のSSH校として指定されたのは旭川西や札幌啓成、室蘭栄、立命館慶祥など、数校しかありません。

湖陵高校におけるSSHの取り組みとしては、「KCS（湖陵センチュリー・サイエンス）」の名の下、全校生徒が3年間にわたり、総合学習の時間などを利用して、必ずいづれかのカリキュラムに参加することになります。

理数科の生徒は3、4人でグループを組み、自分たちで研究したいテーマを決めた上で考え方やプロセスを探究します。例えば「ホタテの貝殻による洗浄作用について」や「昆布のアルギン酸の保湿作用について」、あるいは「海藻からバイオエタノールを抽出するには」など、極めてサイエンティフィック（科学的）でありながらも、やはり港町釧路の高校生らしい地域性にもあふれたものが目立ちます。一方普通科の生徒たちは、指導にあたる教諭が設定した30ほどのテーマに応募して、クラスも学年も横断したグループで探究活動に取り組みます。

さらに高度な拡張プランへ

これらの取り組みを通じて湖陵高校が目指すところは、「将来のイノベーションを実現可能にする資質をもった、世界に貢献できる科学技術人材の育成」という高みですが、そのベースとなる「自ら学ぶ力」「自らの変容を客観的に評価する力」「学びのプロセスを主体的に構築する力」「自身自身を理解する力」を身につけ、生徒の「主体性」「創造性」「国際性」を育てていきます。2期目のSSH指定にあたり、湖陵高校では「E（エクスパンション）プラン」と名付けた今後5年間の実施計画を策定しました。エクスパンシ



北海道大学研修の様子（理数科2年生）

ョンとは、拡大・拡張・発展を意味し、生徒たちが参加するそれぞれの探究活動において、生徒が自ら立案した、さらなる高度なプログラムを支援、実現させるものです。

大学や各種研究機関との連携や協力支援を橋渡ししたり、自治体や民間企業との連携をも目指すというもので、過去の事例として「人獣共通感染症」を探究テーマとした理数科のチームでは、サンプリングとしてエゾシカを捕獲してGPS機器を取り付け、得られたデータを北大獣医学部へ持ち込んで分析、さらに研究成果を日本動物学会や国際シンポジウムで発表しました。しかも、これらの発表や論文はすべて英語で行われるというものでした。かくも高度な学習活動を、日常的な学習カリキュラムの中で行われるというのも、やはり湖陵高校ならではのことで誇らしく感じます。現代のグローバル社会に生きる若人として、「3年間の高校生活で何をすべきか」という問いに向き合うためにも、「失敗を恐れずに、いろいろなことにチャレンジしよう!!」とSSH推進部長の渡邊理実教諭は力説しています。

西村貞広（湖陵30期）

釧路の歴史とともに 町内会設立100周年



「若い時には飛び込んでいくこと」と高橋さん

・子ども会は全国表彰

釧路市の南大通敷島倶楽部町内会は今年、記念すべき設立から100年の節目を迎えました。釧路市内では最も歴史の古い町内会です。同町内会の会長は高橋出さん（湖陵28期）です。人生のほとんどを同町内で過ごし、現在は丸善家具代表取締役を務めている高橋さんに、思い出などを聞いてみました。

高橋さんは、1958（昭和33）年に南大通7丁目生まれ、釧路市立東栄小学校、同弥生中学校を経て湖陵高校に入学、卒業後は、明治大学に進学しました。そして2年間、会社勤めをしたあと、82（同57）年から家業を継ぎました。

子どもころの南大通7丁目付近は、「商店がずらっと並んでいました」と高橋さん。飲み屋も多く、漁業者もたくさん利用し、にぎやかでした。「たしか、ツブ焼きの『ともちゃん』というお店があって、ツブがおいしかったですね。今もツブは好

南大通敷島倶楽部町内会会長
丸善家具代表取締役

高橋 出さん（湖陵28期）
いずる

きです」と笑います。子ども会の活動も活発で、敷島子ども会は、79（同54）年度に全道表彰、80（同55）年度に全国表彰を受けました。

・シユート決めると爽快感

高校時代の思い出を聞くと、「まずは文化祭の行灯行列が思い出されます」と言います。次に「ルンペンストーブ」。「放課後、屋外の石炭庫に行き、翌日使うルンペンストーブを教室に運んでいました」、それと「教室が迷路のようになっていましたね」と振り返ります。

また、体育大会でハンドボールに出場したことも印象に残っているようです。高校に入学して、体育の時間に初めてハンド

ボールを体験したことをきっかけに、その魅力にひかれたそうです。「45度の位置からシユートを決めた時、爽快感がありました」と話します。

明治大学に入ってから、アメリカンフットボール部に入部し、司令塔であるクォーターバックを務めました。これには伏線があり、高校時代に休み時間などを利用して友達とラグビーの練習していました。「東京での生活は暑さとの戦い。防具を着けて猛暑の中を練習するのはとてもつらかったですね。でもそのつらさがあったからこそ、社会人になっても頑張れると思います」と振り返ります。

丸善家具は、同町内会が誕生した年と同じ、19（大正8）年に高橋建具店として高橋さんの祖父が開業しました。社業は発展し、丸三鶴屋などで展示販売し、多い時で約25人の職人がいたそうです。その後、時代の流れから工場部門はやめて、教育施設を中心とした家具の販売を続けています。

佐野碑園で記念式典

さて、19（大正8）年に南

大通7、8丁目の65戸でスタートした町内会。最も多かった時には100戸を数えました。高橋さんは、「昭和30年代がピークで、40年代から少しずつ減り始めました」と話します。現在は32戸。記録によれば、発足当初の町内会費は、1円、80銭、50銭、30銭と4段階に分かれていました。2012（平成24）年に会長になった高橋さんは「町内会では若い方です」と笑います。昨年には、街路灯に100周年を記念するフラッグを掲げました。100周年の今年、9月9日に南大通8丁目の佐野碑園で記念式典を行います。佐野碑園は、釧路を開く上で大きな功績のあった4代目佐野孫右衛門の徳をしのび、釧路港発祥の地に1935（昭和10）年に釧路開港35周年を記念して建てられました。同町内会は、釧路の歴史とともに歩んだとも言えるでしょう。

最後に、高橋さんに現役の生徒たち一言をいただきました。「自分の得意分野を生かし、まずは飛び込んでみる事です。そうすると道は開けます。だめなら次のことを考えましょう。年齢を重ねると、これができるなくなり、若い時の特権です」とエールを送っています。

星 匠（湖陵30期）



大正時代の浦見の高台から見た南大通（黒坂修さん＝元釧路市史編さん室＝所有）



南大通に掲げられたフラッグ

沖口先生の思い引き継ぐ

釧路俳句連盟副会長 山田美智子さん（湖陵4期）

今年1月から3月にかけて6回、愛媛新聞に湖陵高校で教頭を務めていた故沖口三郎さん（1909～90年）の足跡をたどった特集記事が連載されました。四国の松山出身の俳人、柳原極堂（1867～

1957年）をはじめ文人が創刊した俳句雑誌「鷄頭（けいとう）」を、極堂に師事した沖口さんが釧路で復刊したことを伝える連載。沖口さんが湖陵高校で教頭をとっていた時代に生徒だった山田美智子さんは、沖口さんが釧路

でつくった俳句グループ「長月会」を引き継いでいることから、同新聞の取材を受けました。

同誌は32年に創刊、その時、沖口さんは大学4年生で東京の白金台にあった下宿

で編集作業を行っていました。しかし、松山の極堂は高齢のため床に伏せがちで、発刊がままならないこともありました。そこで「極道門下生にとって『鷄頭』は半生の希望であり夢であった」（復刊第1号「復刊のことば」より）と沖口さんは松山から遠く離れた釧路の地で復刊しました。

沖口さんは終戦後、音別町（当時）の二俣中学校に勤務、51年から湖陵高校に赴任し、教務主任（教頭）を経て57年から釧路

北陽高校の初代校長を務めました。退職後は、釧路の俳誌「えぞにう」で師である極堂との思い出や、81年10月に発足した「長月会」などを紹介しています。

山田さんが通っていたころの湖陵高校は、「長靴のまま廊下を歩く生徒をはじめ、バンカラな男子生徒が多く、少し怖かったですね」と振り返ります。また、春採湖畔に授業を抜け出して遊びにいったこと、バドミントン部に入部したことなども山田さん



「男子は少し怖かった」と山田さん

は話してくれました。バドミントンは、釧路に入ってきたばかりで、ラケットのガットが切れてしまうと、釧路で修理することができず、札幌の専門店に頼んだそうです。当時の校長先生は牧野包敏さん（50～55年）だったのですが、なぜか「かばちゃん」と呼んでいたそうで、他の先生たちにもあだ名が付けられていました。

沖口さんの授業を、山田さんは直接受けたことはありませんでした。しかし、後日級友たちに聞くと、そうした「バンカラ」な男子生徒たちは、沖口さんを慕っていたそうです。終戦後の活字文化が華やかになりかけていた時代で、沖口さんと話をする

うちに、文学の世界に引き込まれていったのではないのでしょうか。

山田さん自身も文学に興味があり、俳句の道につながったのでしょうか。山田さんは

道内有数の進学校である湖陵高校に入学すると、生徒は自分の人生の方向付けについて考えなければいけません。1年生の春に、1泊旅行を兼ねたオリエンテーションが大々的に行われます。生徒は理数科、普通科（理系、文系、文理系）の6クラスに分かれます。ここで、大学や学部、職業選びなど、大づかみの説明が行われます。

8月末には、道内外の大学80校が参加して、統一学校説明会があります。札幌や首都圏の各大学はオープンキヤンパスを開き、大学の売り込みに力を注ぎます。地理的に、簡単にアクセスできない湖陵生には、このイベントはたいそう関心を持たれています。大学の担当者も、直接説明してくれるので、生徒にとって、大学と親近感が深まります。

新1年生が受験する2020年度大入学入試から実施される共通テストが始まります。現在のマークシートだけでなく論述式が導入されます。作文や小論文は「不得手で嫌い」との声をよく聞きます。湖陵高校で2回ほど、模擬試験を実施しました。数学は、解答記入したのが50%、正答率は10%。国語は20、50、100の字数で設問しましたが、これも芳しくありませんでした。

「国立の2次試験で論述問題は必須だから、判断力、思考力、表現力を鍛えるため

「長月会を引き継ぐことになったのも、人生の機微を感じざるを得ません」と語っていました。

星 匠（湖陵30期）

に、努力と関心を払って欲しい」と同校の飯田一三進路指導部長は訴えています。教諭と保護者の二者面談もあります。

今年5月、小樽商大、帯広畜産大、北見工大の3校連携のニュースが新聞に載りました。「すわー、いよいよ大学の統廃合か」と色めきましたが、「予備校でさえ何とも言ってません」と飯田部長は泰然としています。

大学入試「王道で」 2020年度から共通テスト

同部は、生徒、保護者向けに、電話帳サイズ200ページ超の「進路のしおり」を編集発行し、配布しています。例えば「進路を選択する」の章で、職業選択↓資格取得試験↓学部学科選択に仕分けされた70ページは圧巻。大学卒業後の職業の大半が網羅されています。毎年改訂版が編集発行され、新しい情報が補充差し替えられます。いくつか大改訂の時は、「お手数ですけど、索引を付けていただけませんか」との要請も。

大学卒業後の就職、その後の再就職にきつと役に立つからです。飯田部長へのインタビューは、2時間にも及びました。確かに社会状況は、時代とともに変化するでしょう。でも結論は実に単純なものでした。「国立に100人超の合格者を送り出すことが、湖陵高校（の使命であり）の王道でもあります」。堀川春昭（湖陵12期）

60歳でふるさと釧路へ

「幅広い知識を持って」

ミヤケ建築計画オフィス代表・一級建築士

三宅 信夫さん（湖陵29期）

東京での会社勤めを今年5月で終え、母校のある釧路市で建築設計の事務所を立ち上げました。5年程前から釧路市内で生活している両親のことを考え、釧路へ戻ろうと、友人にも相談していました。お父さんは、教育社会学が専門で、平和を訴えている北海道教育大学名誉教授の三宅信一さんです。

三宅さんは、釧路市立柏木小学校、同東中学校を経て、釧路湖陵高校に入学しました。そこで「ものづくり」への興味が深まり、武蔵工業大学（現東京都立大学）工学部建築学科に進学しました。折しもオイルショックの波が日本にも押し寄せ、就職が厳しく、大学卒業後は2年間、大学院で学びました。



建築士を目指す後輩には「いろいろな情報を頭に入れて」と三宅さん

大学の研究室では、建築家の広瀬謙二さんが先生でした。広瀬さんは、住宅を鉄骨造りにした「SHシリーズ」を作るなど、日本の建築界に大きな影響を与えました。それだけに、同研究室に集まる人や情報も多く、たくさんのことを学びました。三宅さんは「今でも、研究室の先輩や後輩と親交

があり、勉強になっています」と話します。

大学院修了後は、東京に本社のある山下設計に入社しました。国内でも大手の設計事務所、行政施設や病院をはじめ、渋谷のNHKなど、さまざまな建物を手がけています。札幌の北海道支社にも10年ほど勤務したこともあり、その際には、釧路市観光国際交流センターの建築にも携わりました。

会社の定年は60歳で、延長で65歳まで勤めることができますが、60歳を機に釧路へ。事務所は、両親の住まいに近い住吉1の11。偶然なのでしようか、湖陵高校の旧校舎まで歩いて数分という場所です。釧路で建築設計会社を開業するに当たり、不安もあつたそうですが、決断しました。三宅さんは「建物の改修など、困っている方がいれば、一緒に考え、これまでの経験を生かしてお手伝いをしたいですね」と話しています。

高校時代の思い出を聞いてみました。この頃から、漫画にはまりました。特に水島新司の「あぶさん」（1973〜2014

年）が好きで、あぶさんがバッテリーボックスに立って日本酒を吹きかける場面にあこがれ、今でも日本酒が好きだそうです。卒業アルバムを見せてもらいました。一般的には、写真の下にある生徒名は印刷会社で印字するのですが、三宅さんが卒業した3年6組は本人の手書き。とても個性的なクラスだったようです。

山下設計では、営業も経験しました。三宅さんは「どの道に進んでも、自分のやるべきことは必ずあります。それぞれの道で頑張ってほしい」と後輩にエールを送ります。また、建築士を目指している後輩には「まずは、一級建築士を早く取得すること。そして、建築は人間の生活そのものです。さまざまな情報を取り入れ、何でもかんでも興味をもって知識として蓄えておくと、建築に生かすことができます。施主とのコミュニケーションを忘れず、お互いに納得のできるものを作りましょう」とアドバイスしています。 星 匠（湖陵30期）

数学コンテスト 北海道1位



理科科の山本佳和さん（2年）掲載当時）は「写真」、第36回北海道高等学校数学コンテスト（北海道算数数学教育会高等学校部会主催）で、北海道1位の栄冠をつかみ、全道から数学を得

意とする中高生が挑戦する同コンテストの問題は、なかなかの難問ぞろい。上位20人には、数学者の秋山仁賞が贈られており、これまで湖陵高校の生徒も獲得していますが、全道トップは初めての快挙。山本さんも「びっくりしました」と笑顔を見せていました。

（釧路新聞 2018年3月6日付から）

星 匠（湖陵30期）

関西湖陵会

SNSで呼びかけ



各地湖陵会のトップバッターとして開催された関西湖陵会

第11回関西湖陵会(小川清至会長「湖陵17期」)の総会と懇親会が5月26日、大阪市内のヴィアール大阪で開かれました。関西在住の同窓生や各地湖陵会などから約30人が参加しました。

物故者への黙とう、校歌斉唱に続いて小川会長が「釧路、札幌、東京での湖陵会の中で、関西が最も早

い。今年はSNSなどで呼びかけ、若い人たちの参加も増えました。今後も人のつながりから新たな同窓生を引っ張って来てください」とあいさつ。来賓の釧路湖陵同窓会の島本幸一會長(湖陵19期)は釧路の近況とともに「各地でネットワークを築くことは大切なこと」、札幌湖陵会の稲村尊史會長(同26期)は「アットホームな雰囲気を楽しみます」、東京湖陵会の割方俊介副會長(同28期)は「大阪で校歌を聞けるのはとても新鮮」などと祝辞を述べました。

懇親会では西田暉至さん(湖陵7期)が乾杯の音頭をとり、和気あいあいと同窓生たちは交流を深めていました。

役員は次の通りです。星 匠(湖陵30期)

◇会長 小川清至(湖陵17期)、副会長 林正樹(同18期)、幹事 佐田聖二(同23期)・藤本司(同34期)・中村麻文(同35期)・一見京子(同36期)

東京湖陵会

応援歌も披露

東京湖陵会(諏訪幹雄會長「湖陵23期」)の第29回総会が6月16日、都内のホテルポールポルム麹町で約170人の同窓生が参加して開かれました。

物故者への黙とうをささげたあと、合唱部OBがステージに上がり参加者全員で校歌を斉唱。続いて諏訪會長があいさつ、来賓の蝦名大也釧路市長(同29期)が祝辞を述べました。

総会では、事業、会計報告が承認され、今年度は会報発行、会員の拡大と組織化、各地湖陵会との交流などを柱とする事業、予算案を決めました。

懇親会では、釧路湖陵同窓会の島本幸一會長(同19期)が乾杯の音頭をとり、始まりました。抽選会や懐かしい応援歌の披露なども行われ、ふるさと釧路や高校時代の思い出話に花が咲いていました。最後に、札幌湖陵会の稲村尊史會長(同26期)、関西湖陵会の小川清至會長(同17期)が締め、来年の再会を誓い合いました。星 匠(湖陵30期)

なお、役員は次の通りです。



懇親会では高校時代に歌った応援歌披露も

◇会長 諏訪幹雄(同23期)、副会長 三上希予子(同18期)・八幡隆文(同21期)・割方俊介(同28期)、幹事長 本間俊一(同37期)、副幹事長 澤田雅弘(同37期)、会計長 和泉美紀(同35期)、会計監事 野村麻利子(同27期)・中山紀子(同36期)

札幌湖陵会

応援団に女性も

第32回札幌湖陵会(稲村尊史會長「湖陵26期」)の定期総会と懇親会が7月7日、札幌市内のポールスター札幌で開かれ、約250人の同窓生が参加しました。

物故者への黙とう、校歌斉唱のあと稲村會長が「先輩、同期、後輩が仲良く、楽しく過ごしてください」とあいさつ。来賓の釧路湖陵高校の西堀隆亮校長(湖陵30期)は「毎朝、玄関前で生徒たちとあいさつをかわしていますが、母校は温かく、充実した毎日を送っています。文武両道、勉強、スポーツに生徒たちは頑張っていますので、今後も支援を」、蝦名大也釧路市長(同29期)は「釧路市教育委員会の岡部義孝教育長も同窓生(同30期)、湖陵高校には同期の西堀校長がいますので、小中学校と湖陵をはじめとする高校への道ができたのでは」と祝辞を述べました。

渡辺実さん(釧中27期)と本間秀一さん(湖陵6期)が壇上に上がり、乾杯の発声で懇親会は始まりました。すっかり恒例となった応援団は、中川晋さん(同11期)が指導、今回は女性も加わり、盛り上がりました。

役員は次の通りです。星 匠(湖陵30期)

◇会長 稲村尊史(湖陵26期)、副会長 浅沼和明(同28期)・長浜光弘(同32期)、幹事長 鹿又智峰(同30期)、幹事 畑みゆき(同28期)、残間渉(同45期)、会計 佐藤里枝(同33期)・小波朋子(同42期)、会計監査 菊地克保(同13期)、名誉顧問 中川晋(同11期)、顧問 伊藤拓摩(同21期)



大先輩の渡辺さんの音頭で懇親会がスタート

11月に研修会も



釧路教職員湖陵会(小向聡会長
湖陵29期)の総会と懇親会が、
7月7日にアクア・パールで開催
されました。写真

新年度の体制は、引き続き会長
には、小向聡(湖陵29期) 釧路町
立富原中学校校長)、副会長に大
森伸(同29期) 釧路市立青陵中学
校長)、伊藤晃一(同32期) 同鳥
取中学校校長)、新谷修(同32期) 釧
路町立遠矢中学校校長)、本川
敬一(同33期) 釧路市立鳥取小学
校長)、測本浩之(同36期) 鶴居
村立幌呂中学校校長)、幹事長に
長谷川充夫(同43期) 同鶴居小学
校教頭)、副幹事長に奥田真
由(同36期) 釧路市立桜が丘
小学校教頭)、富田直子(同40
期) 同鶴野小学校教頭)、市
川仁(同42期) 標茶町立虹別
小学校教頭)、会計長に吉田
多喜衣(同31期) 釧路市立鳥
取西中学校)、会計幹事に岩
谷拓実(同39期) 浜中町立散
布小学校教頭)がそれぞれ就
きました。

また、11月10日(土)には、
恒例の研修会が、まだ講師は
未定ながら開催されるとの
ことで、こちらも楽しみな報
告がありました。

奥田泰朗(湖陵25期)

「釧中物語」編集 高橋さん 遺稿集「さくら草」出版

北海道新聞、北海タイムス、釧
路新聞の編集畑を歩んだ故高橋
一美さん(2013年、米寿で死
去)の遺稿集「さくら草」が、妻芳
子さんの手で出版されました。
出版を記念し、ご夫妻と親しい友
人、知人らが参加し、祝
う集いが昨年開かれま
した。

高橋さんは、新聞社と
いうややコワモテの組
織にあつて「赤鉛筆の編
集局長」とか「どなりの
ターサン」とかのニック
ネームが付けられ、同僚
や若手記者から畏敬さ
れていました。生前既に
新聞コラム集、石川啄木
伝、明治末期の釧路をえ
ぐった社会小史、日本型
の高齢社会に正面から
挑戦した論著など片手
に余るだけの著書を出
しています。

遺稿集のエッセーに
は、エンレイソウ、スズラン、タ
ンポポ、コザクラなど、実に釧路
地方ではありふれた野の花たち、
道端の草たちが登場します。一編
あたり1000字前後で、読みや



「出版を祝う集い」の記念撮影、前列中央が芳子さん

すい文章です。昭和初期の一青少
年の目に映った世界には、叙情と
詩心がみずみずしく息づいていま
す。

高橋さんが逝ってはや5年。芳
子さんが故人愛用の机回りを整

判断しました。編集のベテランで
本行寺ゆかりの福田昭南さん、古
くから友人である工藤淑子さん
と相談の上、私家版として発行す
ることを決め、「日の目」を見まし
た。

こうして遺稿集は書家、伊東才
籽さんの墨絵と題字がページ
色の表紙に収まり、本文はエッセ
ー、筆一之助の俳号で手がけた代
表句44句、生前の高橋さんの集合
写真、記念写真、スナップなどの
アルバム、令息一穂さんら肉親、
近親者の謝辞と4部構成になつて
います。

高橋さんは、釧路新聞編集局長
時代に、湖陵高校の前身である
「釧中物語」のタイトルで大正2
年から戦後の学制改革までに釧中
で過ごしたOBらが登場する連載
を担当。自身がOBである奥田達
也さん(湖陵1期)が健筆を振る
い、堅牢なクロス装の本にもなっ
て、いわば「釧中人国記」の内容
で、OBらが集まると、しばしば
話題になります。高橋さんはこの
編集出版では「大いなるサポータ
ー」として活躍したことを付記し
ておきます。

堀川春昭(湖陵12期)

放送局が朗読で

第65回NHK杯全国高校放送コンテスト北海道大会朗読部門で、最優秀賞に放送局の西川友彰さん(17)、6位に齋藤千尋さん(17)、9位に上田七菜さん(18)が輝きました。西川さんは昨年の高文連に続いての2冠達成で、同一部門での3人入賞は釧根支部初。



全国大会に出場する上田さん、西川さん、齋藤さん(左から)

品は自分にか読めないという自信がありました」と話し、見事、最優秀賞をつかみ取りました。西川さんは「評価を気にし

ず、3年間をささげた朗読をぶつきたい」と目標は頂点。齋藤さんは「聞き手に作品の世界を想像してもらえような朗読がしたい」、上田さんは「初めての全国大会。相手に伝わる朗読をし、自分自身も楽しみたい」とそれぞれ意気込みを語っていました。

女子登山部も

6月に行われた全国高校総体(インターハイ)北海道予選の登山競技に出場した女子登山部が、最上位の最優秀賞を獲得し、見事全国大会出場を決めました。女子登山部の全道制覇は同校初で、釧根支部では1986年の標茶高校以来の快挙を達成しました。



全道大会に出場する石山さん、高木さん、伊藤さん(左から)

たので次は頑張りたい」。石山侑芽さん(同)は「全道ではいろんな学校と戦えるので緊張したが、楽しめる登山ができました」。伊藤涼葉さん(同)は「全国は夢かと思った。うれしい半分、悔しい気持ち半分なので次につなげたい」とそれぞれ喜びを語っていました。

道大会は6月25日から3泊4日の日程で、上ホロカメツク十勝岳、オプタケシケ山を舞台に、気温10度、強風や雨、霧という悪天候の中で実施されました。競技は4人1チームで山を登り、装備、炊事、気象など11項目

計100点満点で争われ、同部は体力、歩行技術、記録、行動テストなどで高い得点を獲得。合計88・025で、ライバルと称する2位の旭川東に2・925の差を付けるなど、出場11校の頂点に立ちました。



(前列右から) 奥田泰朗、堀川春昭、田中嘉寛、(後列右から) 田巻恒利、西村貞広、星匠

編集後記

通勤の途中に我が母校、湖陵高等学校があります。現在(7月中旬)学校祭の準備の真最中でしようか、各クラス様々な山車?を制作中であります。私のころは旧校舎の中庭のようなどころで制作していた記憶があります。50年近く前のことです。確か、理科の先生が船用の電池を蓄電してくれていたような記憶があります。これが意外に重くて、更に30セット近くもかき集めるにはどうしていたんだろうか。現在は船の電池は使っていないだろうか。またコースは

かなり変更したのだろうか、などなど興味は尽きません。この文を書くために、取材に行つて写真でも撮つてよいかなども考えたのですが、私が努めている児童館にも毎日情報提供される、不審者情報を読むと、自分が何者であるか説明して、シャッターを押すまでとんでもない時間がかかりそうですね。あーあ、面倒くさい世の中になったもんだ。

奥田泰朗(湖陵25期)

釧路湖陵高校

〒085-0814
釧路市緑ヶ岡3丁目1番
TEL(0154)43-3131
ホームページ
<http://kushiro-koryo.hp.infoseek.co.jp/>

くまざさ編集委員会

- 同窓会会長 島本幸一(湖陵19期)
- 同窓会会計長 佐藤文昭(湖陵22期)
- 編集委員長 星匠(湖陵30期)
- 編集委員 堀川春昭(湖陵12期)
- 編集委員 奥田泰朗(湖陵25期)
- 編集委員 田中嘉寛(湖陵36期)
- 編集委員 西村貞広(湖陵30期)
- 編集委員 須貝喜治(湖陵49期)
- 編集事務局長 田巻恒利(湖陵18期)

くまざさ編集委員会

〒085-18650
釧路市黒金町713
TEL0154(22)1111
FAX0154(22)0050
釧路新聞社内 星匠